

大阪市鶴見緑地内「こどもホスピス創造広場」における創作活動と芸術療法の可能性に関する研究報告

福原成雄・柿沼祐太・加治大輔・田口雅一

はじめに

2015年2月、大阪市鶴見緑地内「こどもホスピス創造広場」創作活動について、大阪芸術大学短期大学部事務局の工藤皇局長より協力依頼を受けた。2015年2月26日、社会福祉法人産経新聞厚生文化事業団顧問の大船一美氏、大阪市立総合医療センター小児医療センター小児神経内科副部長の岡崎伸氏とお会いし、2016年に開園予定の創造広場の内容についてお聞きした。

ホスピスは、元々「おもてなし、旅人がやすむところ、病の旅人を看護するところ」等を意味し、現在の終末期ケアは全体の3%程度である。「こどもホスピス」は、闘病中のこどもがいつとき癒されたり、亡くなる子が残された時間を充実して過ごせるように、様々な工夫がなされている場所である。その活動は1982年に英国オックスフォードで始まり、多くの国々に影響を与えている。そこには生命を脅かすような重い病気を抱え、中には余命を宣告されながらも限られた時間を懸命に生きる子供たちがおり、医療・福祉・教育の現場で活躍するスペシャリストを中心にしたスタッフ・ボランティア達が友として寄り添い、兄弟姉妹・両親など身近な人々への支援も行っている。今では世界中に広まり、日本でも取り組みがなされてきている。

鶴見緑地の「こどもホスピス創造広場」はユニクロと日本財団が寄付をして大成建設が建築設計・施工を行い、本学には建物周辺の環境整備、子供との遊びなどの活動についての協力依頼があった。2015年4月から建築学科3回生の「環

境デザイン実習Ⅱ」前期課題で取り上げた。

そして2016年度から2018年度までの3年間、本学藝術研究所研究調査補助費『大阪市鶴見緑地内「こどもホスピス創造広場」における創作活動、芸術療法の可能性に関する研究』による活動を行なった。本報はその活動報告である。

1. 建築学科環境デザイン実習の前期課題

- 1) テーマ：公共施設のランドスケープ
- 2) 目的：公共施設の環境デザイン（公共施設のランドスケープに関する課題調査・計画・設計・プレゼンテーション）
- 3) 課題：前期課題「こどもホスピス創造広場」のランドスケープ



写真-1 鶴見緑地内こどもホスピス創造広場位置図

「こどもホスピス創造広場」(4300㎡)は、子どもたちの創造性と共同性を育む遊びの場で、建物TSURUMIこどもホスピス(2000㎡)と原っぱエリア(2300㎡)からなっている。原っぱエリアは市民も利用する広場である。

4) 位置：鶴見緑地駅から南へ徒歩3分である。

- ⑤ 残された家族が望む限り、在り続ける。
- ⑥ LTCの子どもと家族が承認される社会にしてゆく。



写真-3 説明と質疑応答

2. ランドスケープ計画案決定以前の打ち合せ

1) 第1回打ち合せ：2015年4月24日

最初の現地説明・調査である。こどもホスピス館長の大船一美氏、大成建設設計室長の片瀬順一氏、大成建設関西支店課長の太野龍二氏、日本財団ソーシャルイノベーション本部チームリーダーの小澤直氏と打ち合せをし、現場確認を行った。



写真-2 現地調査

3) 第3回打ち合せ：2015年6月19日

現地の再確認とラフ計画案の発表である。館長の大船一美氏、大成建設の片瀬順一氏、太野龍二氏と最終計画案作成のための現場打ち合せと現場確認を行った。ガールスカウト大阪府連盟の松村氏、稲井氏も参加した。



写真-4 計画素案の発表

2) 第2回打ち合せ：2015年5月22日

大阪芸術大学にて、こどもホスピスの内容についての質疑応答を実施した。館長の大船氏、介護士諸氏、ガールスカウト大阪府連盟の松村祥氏、稲井佳奈枝氏が参加した。

TCHホスピスケアについて以下の説明がなされた。

- ① 同世代の子どもと同じ経験ができるようにサポートする。
- ② 子どもの願いを聞き、一緒に考えて形にする。
- ③ 子どもが成長に準じた今を生きられるよう、保護者の理解を変える。
- ④ 理不尽な死による家族の後悔を軽減させる。

4) 第4回打ち合せ：2015年7月24日

「こどもホスピス創造広場」のランドスケープについて公開プレゼンテーションを本学建築学科環境デザイン分野実習室で行った。参加者は、こどもホスピス側関係者と本学教職員、学生である。環境デザイン分野の3年生12名が各自の案について発表した。発表者は赤木耀、北口貴志、木山善幾、清水茉里奈、田中健、服部裕也、増田大輝、村井康一郎、江川佳奈子、増野寛人、吉川侑希、喜多遥で、担当教員は福原成雄

と下休場千秋であった。



写真-5 公開プレゼンテーション

5) 公開プレゼンテーションの結果

発表結果として、清水茉里奈のランドスケープ計画提案を基にして造成工事・植栽工事・施設配置を実施することになった。



写真-6 計画パネル



写真-7 計画模型

6) 案決定の作業提案

造園施設は3～5年後の完成を目指して以下のように作業検討を行うことにした。

- ① 2015年度: 造園工事図面の作成、造成工事・設備工事・園路工事(工事業者が行う)、植栽工事(入所する子供達、近隣の子供達、ボランティア、こどもホスピス関係者、大阪芸術大学学生、工事業者が協同して行う)。「2016年度大阪芸術大学藝術研究所研究調査補助費」の申請検討。
- ② 2016年度: 手作り遊具・ベンチ・オブジェ・案内板・花壇・野菜畑作り(入所する子ども達、近隣の子ども達、ボランティア、大阪芸術大学学生が参加して行う)。
- ③ 2017年度: 五感の庭・生き物の庭・瞑想の庭等の各種庭園作り(入所する子ども達、近隣の子ども達、ボランティア、大阪芸術大学学生が共同して行う)。

他に子供達の遊びや催しを調査研究し、上記内容のデザイン・制作を行う。子どもの展示会・演奏会、思い出写真会、似顔絵会の他に、お正月・お花見・雛祭り・端午の節句・七夕・夏祭・収穫祭・クリスマス会等の屋外での催事実施を検討する。

7) 打合せ 2015年7月31日

鶴見緑地こどもホスピス広場現場事務所にて午前10時から12時まで、こどもホスピス創造広場造園工事の打ち合せを行った。出席者は、館長の大船一美氏、大成建設株式会社関西支店作業所長の青木康造氏、関西支店課長の大野龍二氏、設計本部建築設計第五部設計室の出口亮氏、設計本部環境デザイン室室長の山下剛史氏、設計本部環境デザイン室の木川薫氏、株式会社大西東山造園営業部の大西豊氏、株式会社オバケプランナーの松倉早星氏、大阪芸術大学建築学科教授の福原成雄、同副手の堀川猛史、環境デザイン分野3年生の清水茉里奈、江川佳奈子であった。(写真-7)

まず大成建設で計画された建物、ランドスケープ等について配布資料を基に説明がなされた。福原が本学での現在ま

での取り組みを説明した。今後の方針を検討協議し、今回の工事の内容確認を行った(造成工事、設備工事等)。

そして清水茉莉奈が計画案を説明し、案の実施について各部の実施可能性や大阪市との関係について検討を行った。

工事日程は2015年12月24日が建築の引渡し予定で、12月に各種検査が行われるため、逆算して外構工事(囲い・門扉・最低限の植栽・建物周り等)を11月に行うことにした。建物からの排水工事等のインフラは10月に荒造成工事で、9月末までに設備関係ルート、池の形状等を検討して図面が完成している必要があることが判った。さらに樹木・地盤・勾配・排水等について本工事との擦り合わせ、大阪市への報告の現場進捗状況のレベルを課題としてあげた。苗木植樹はクリスマスに式典として行うことにした。

計画としては、敷地現況と清水茉莉奈のコンセプトを受けて外構工事図面を作成し、残土の活用とマウンドの計画、調整池、外路のアスファルト舗装、建物周りのフェンス設置などについて検討を行った。植栽についてはシンボルツリーを5mのクスノキとし、フェンスに低木・中木を配植することにした。成木が育たないので、苗木を植栽することにし、地被は種子吹き付けとなった。植栽用客土については低木と地被の分は客土を行うが、その他は何もしないことにした。排水路を建物周りに設けて排水を既存の下水に流せるようにし、貯水池は法的に決められた大きさで深さをできるだけ浅くすることにした。

外構工事の工程については2015年9月中旬までに造成マウンドの形状を確定して9月末に植物の材検を行い、10月にフェンスと門扉を決定して10月から工事を行うことにした。造成工事は11月初め、植栽工事は11月中旬に2週間、舗装工事は11月中旬に行うこととなった。

大阪市には本学側の図面を早々に見せて意見を聞くことにした。敷地南側のポプラ並木については大阪市管理区域である。



写真-8 建築工事現場にて打合せ

3. 平成28年度 藝術研究所研究調査補助の採択(研究調査補助-その1)

※ 本報の構成に合わせて一部微修正

研究課題：『大阪市鶴見緑地内「こどもホスピス創造広場」における創作活動、芸術療法の可能性に関する研究』

1) 目的

「こどもホスピス創造広場」が2016年4月に開業されることに伴い、この施設関係者・子供達と大阪芸術大学教員・学生が共同して下記研究活動内容の提案を行う。こどもホスピスの存在意義を学び、理解を深め、普及活動を行う。自然体験活動、創作活動、芸術療法活動の提案を行う。緑化、遊具施設設置、維持管理などのボランティア活動を行う。

これらの創作活動・芸術療法活動が、どのような効果をもたらすのか、考察・検証することを研究目的とする。

2) 期待される成果

日本には、難病と言われる子どもが20万人いると言われ、その内、生命にリスクのある子どもの数は2万人いると言われている。その数は年々増加傾向にあり、毎年多くの尊い命が失われている。重い病気の子どもたちは、本来であれば当たり

前に享受すべき遊びや学び、様々な体験など、子どもらしく楽しい時間が損なわれている。家庭においても精神的、肉体的、経済的な負担は大きく、社会的に孤立しがちになるという現状も早期に解決すべき課題と言える。

2008年から難病の子どもたちへの支援活動を始めて、2012年、大阪市総合医療センターの医師や看護師を中心とするメンバーが「一般社団法人 こどものホスピスプロジェクト」を立ち上げた。同時に訪問支援・教育支援・小旅行支援・遺族支援の各チームが現場の活動をスタートさせ、今では100名を超えるボランティアによって支えられている。今後は英国モデルの子どもホスピスを日本に構築することを目指す。

2015年、環境デザイン実習Ⅱ(3年生)前期課題として建物周り、広場の計画提案を行った。結果、学生の提案を実施に向けて取り組むことになった。今後、大阪芸術大学・短期大学の教員学生が参加し、芸術活動を通した取り組みが多く、難病を抱えるご家族の心の支えになり、本学の建学の精神及び理念である「自由の精神の徹底・創造性の奨励・総合のための分化と境界領域の開拓・国際的視野にたつての展開・実用的合理性の重視」を推進し、大きな社会貢献に寄与するものと考えられる。

3) 研究計画・方法

- ① 子どもホスピスの存在意義を学び、理解を深め、大阪芸術大学としてどのような芸術活動の取り組みができるのか研究、普及活動を行う。
- ② 自然体験活動・創作活動・芸術療法活動の提案を行う。

子どもと関わる様々な現場で活躍する専門家と協力し、新たな遊び方を共に研究する(遊び方研究会)。大切な子どもを亡くした経験を持つ家族、あるいは、まだ亡くされて日の浅い家族に寄り添う(ビリーブ)など。音楽や遊びを楽しむ催しや、学校に行けない子ども向けの教育プログラム作成、子どもの遊び活動を刺激するデザイン制作、芸術活動の新たな領域の構築を行う。
- ③ 緑化、遊具施設設置、維持管理などのボランティア活動を行う。

自然体験活動は、低く大きく枝をはる木を植え、そこで木登りをしたり、木陰で絵本を読んだり、クラフトをつくったりするといった活動の検討を行う。木肌の違う木(つるつる、ザラザラ…など)、落葉樹・常緑樹、針葉樹・広葉樹、果樹など様々な木を少しずつ植えて五感を刺激し、自然を楽しむプログラムの提案や活動を行う。

4. 計画案決定からの活動

1) 砂利ひろうデー 2016年2月11日

2015年12月にTSURUMI子どもホスピスの建物が完成した。英国では地域の子供達、ガールスカウトやボーイスカウト、大学生などが主体的に広場作り、花壇の植え替えなどを行っている。これをふまえ、まずは石をひろう会を結成することになった。



写真-9 砂利ひろうデーの案内



写真-10 砂利ひろうデー



写真-11 砂利ひろうデー

2) 整地・石組 2016年3月23・25・28日



写真-12 整地工事

3) 高木植えるデー 2016年3月29・30日

高木樹木は大成建設有志の寄付で、配置は清水菜里奈の植栽計画図に基き行なわれた。



写真-13 高木植栽工事

4) 「TSURUMIこどもホスピス」オープニングセレモニー

2016年4月1日

式は、一般社団法人こどものホスピスプロジェクト理事長高場秀樹氏、日本財団会長笹川陽平氏、株式会社ユニクロ代表取締役会長兼社長柳井正氏、大成建設、こどもホスピス関係者、大阪芸術大学教員、学生、工事関係者が出席して行われた。また、大阪芸術大学 OUA テレビの取材を受けた。



写真-14 オープニングセレモニー

5) 芸大テレビ # 33 のニュースでオンエア

開所式の様子は5月27日に芸大テレビで放映された。学内でも食堂前モニターで映され、多くの学生にこどもホスピスが紹介された。

6) 打合せ 2016年5月30日・6月27日

舗装、芝生の増設について打合せを行った。

7) 苗木植えるデー 2016年7月2・3日

敷地南側グラウンドと接する築山斜面に、防音、防砂、緑陰を目的に、将来を見据えて建築学科フィールドワーク実習の学生、大学院生が約300本の苗木植栽を行った。



写真-15 木うえるデーの案内



写真-16 苗木植えるデー

8) 夏祭りワークショップ打合せ 2016年7月18日

TCHファミリーケアマネージャー市川雅子氏と夏祭りの企画打合せを行った。

9) 夏祭りワークショップ打合せ 2016年7月21日

竹スロープ、ワークショップの説明を行った。参加者は堀口、清水、多久和、史、山上、原、山本、石川、小寺であった。

10) 竹班・遊び班の各検討会 2016年7月27日

環境デザイン分野合研にて竹班と遊び班に分かれ打合

せ、遊びの仮案を考える。

参加者は清水、多久和、史、石川であった。

11) 遊びについて打合せ 2016年8月5日

ホスピスで打合せし、おもちゃ買出しと芝生広場雑草抜きを行った。参加者は堀口、清水、多久和、山上、原、山本、石川、松川、小寺であった。

12) 夏祭りワークショップ準備 2016年8月10日

前日準備、ホスピスの室内で看板・パネルを制作し、芝生広場で竹スライダーを設置した。



写真-17,18 夏祭準備

13) 夏祭りワークショップ 2016年8月11日

本番当日ヨーヨー釣り、スーパーボールすくい、景品交換を行った。



写真-19 夏祭

14) 花壇・野菜畑作るデー打合せ 2016年10月9日、31日



写真-20 菜園と花壇を枕木で制作(後日の施工風景)

15) 調整池修景の打合せ、生垣・花壇・野菜畑を作るデーの打合せ 2016年12月12日

16) 調整池修景・生垣植えるデー 2016年12月13日、14日



写真-21 調整池周りの修景植栽

17) 休憩ベンチ・柵・ゲートの提案と打合せ 2016年7月18日

それまでの打合せで施設管理者側から「施設がパブリックな抜け道として開放されすぎているため、防犯や事故防止の観点から、敷地内にも、ある程度の囲いが欲しい」「玄関前が判るようにゲートが欲しい」といった意見があった。これをふまえて、建築分野の加治研究室を中心に以下2案を計画し、主にCGで提示した。

第一案(写真-22)は相手の要望に近い案で、建物の縦板

外壁に素材感と木幅を合わせた高さ700mm程度の木調の塀に門柱を設けた案である。

第二案(写真-23)は、木調のベンチとプラントボックスをユニット化し、それを複数組み合わせる案である。この案は日常の要求や各催事に合わせた配置変更が可能で、椅子の向きや組み方でコミュニケーションが生まれることも意図している。出入口はスイングドアである。素材は両案ともに木の質感を有する、木材と樹脂(PP・PE)を混合した長期メンテナンスフリーの耐候性材料である。これは実際に公園や港湾等で使用されている。打合せの結果、後者の第二案が好まれたが完全な合意、決定には至らなかった。ユニット型ベンチについて催事での利便性から引き続き検討することとなった。



写真-22,23 柵・ゲート・休憩ベンチの提案(案)
木調のベンチとプラントボックス(案)

18) ベンチの別案・池柵化粧の提案と打合せ

2016年10月31日



写真-24 計画エリア(朱線は元図を基に強調)

調整池の周囲の防止柵は当時(写真-25)、ステンレスパイプとトラロープ、グリーンネットが張り巡らされていた。「パイプの質感とロープの色が景観に馴染まない」という意見があったため、パイプを前述の木質の混合材料で覆い、トラロープをグリーンロープに変更する具体案を図面で提示した。

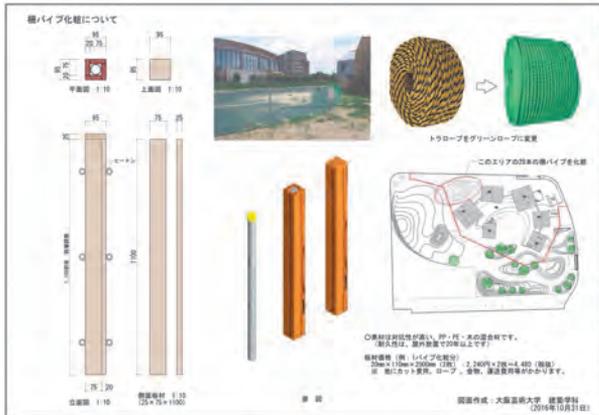


写真-25 調整池周囲の転落防止柵の化粧案

休憩ベンチ(写真-26)については、ユニットを前回案よりも簡素化・軽量化し、持ち運びや組み換えが容易な案にした。平面形状を台形にして、円弧状やS字状など多様な配置が出来るようにした。高さにヴァリエーションを持たせて様々な身体状況に対応できるようにした。素材は先の木質系混合材料である。

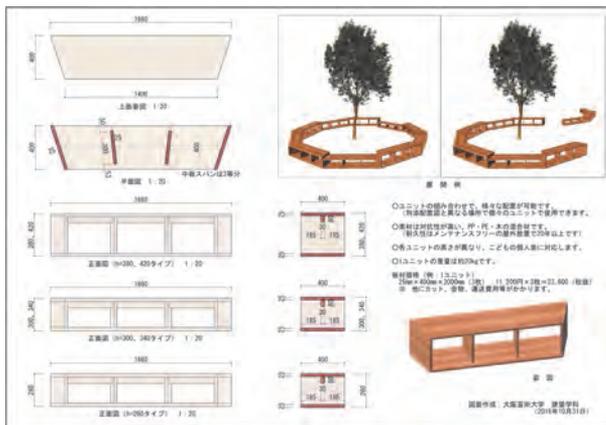


写真-26 休憩ベンチ寸法図(案)

5. 2017年度の研究活動(研究補助費継続)

1) 近隣幼稚園児の広場活用の見学、今年度作業の打合せ 2017年5月20日

参加者は本学が福原、松川、小寺、清水、吉澄、大学院生2人であった。TSURUMIこどもホスピス側は水谷、山本、大矢各氏であった。



写真-27 創造広場を幼稚園児が利用



写真-28 今年度の作業内容の打合せ

2) 子どもたちと菜園植栽 2017年6月10日

参加者は本学が福原、松川、小寺、清水、末廣、学生11名、TSURUMIこどもホスピス側が水谷、山本、大矢、田中各氏であった。多くの子どもたちやホスピス関係者に大阪芸術大学の取り組みが評価された。



写真-29 子供達と菜園植栽

3) 子どもたちと花壇植栽 2017年6月24日



写真-30 子供たちと花の植栽

4) 夏祭りワークショップ準備作業、看板・パネルの制作、竹スライダー設置 2017年8月16日・17日



写真-31,32 夏祭りの準備作業

5) 夏祭りワークショップ 2017年8月18日・19日

本催事も、子どもたちやホスピス関係者に好評であった。



写真-33,34 夏祭り

6) 造園学会関西支部大会 2017年10月15日

支部大会にて本学大学院芸術研究科 環境・建築領域の清水茉莉奈が中心になって『大阪市鶴見緑地内「こどもホスピス創造広場」における創作活動、芸術療法の可能性に関する研究』を発表した。内容は広場の活用方法の提案、植樹、維持管理、夏祭りの企画・開催を大阪芸術大学教員・学生・施設関係者と共同して活動を行なったことについてである。結果、「優れた研究・事例発表を行った発表者」に授与される日本造園学会関西支部賞を受賞した。



写真-35 日本造園学会関西支部での発表



写真-36,37 賞状と清水茉莉奈

7) 木製ベンチ作品打合せ、子供達と芋掘り

2017年10月28日

参加者は本学が福原、松川、小寺、清水、建築科副手、学生・大学院生、田口ゼミ学生2名(木匠塾)、奈良女子大学生7名、こどもホスピス側が水谷、大矢、ボランティア田中であった。



写真-38 木製ベンチ打合せ



写真-39 子供たちと野菜の収穫

8) 木製ベンチ案について

建築学科田口研究室では広場に設置する木製ベンチの制作を担当した。当研究室では川上村木匠塾という活動を展開しており、吉野杉を特産とする奈良県吉野郡川上村へ毎年出掛け、間伐材を利用した制作物を制作する過程で林業、建築、コミュニケーション、伝統文化、地域貢献等について

学んでいる。日頃より、林業の再生や地域振興には、この活動の都市部における展開の必要性を感じており、その可能性を模索していたが、今回福原先生のお声掛けで、こどもホスピスという願ってもない環境の中で川上村産の間伐材を使用したベンチを制作させて頂く機会を得た。

学生達は「座る」機能だけでなく、「寝る」や「遊ぶ」といった要素を取り入れ、言わば木製のハンモックとでもいうべきデザインを提案し(写真-40)、了承された。製作は大阪芸術大学内で材加工とモックアップを行い、現地で組み立て(写真-42,43)、防腐剤塗布、乾燥を経て、無事完成した。(写真-44,45)

活動を通じて実感したのは、こどもホスピスという拠点がある事で学生も参加しやすく、制作物というハードなメディアを介してでも、コミュニケーションが図れるという事である。又、子どもたちにとって今、何が必要なかを考えながら、自分達が得意とする木材の活用方法を考えるというボランティアな活動の本質を表現できた。学生達は製作中の動画を作成し、子どもたちに見てもらえるよう準備したのだが、タイミングが合わず、時期を逸してしまった。本来であれば学生達が楽しそうに作業をしている姿を子どもたちに見て貰い、学生達と子どもたちとのコミュニケーションが図れると、なお良かったのであろうと推察される。木匠塾における林業再生や地域振興と同様、終末医療のあり方に対して、我々が今すぐに何がしかの発言や提案をする事は不可能であるが、この芸術活動を継続する事で別の形での貢献ができるのではないかと、という期待を抱かせる体験であった。

9) 木製ベンチ作品のプレゼン、菜園の植栽 12月3日

本学建築学科と奈良女子大学生生活環境学部住環境学科の学生が木製ベンチ作品、ゆりかご案、テント風案、ハンモック風案、組木風案のプレゼンを行い、結果、ハンモック風案に決定した。また菜園の植栽を行った。参加者は本学側が福原、田口、松川、小寺、卒業生2名、木匠塾学生の17名であった。こどもホスピス側は水谷、大矢、市川、西出、青儀各氏であった。



写真-40,41 木製ベンチのプレゼン・野菜植え

10) 木製ベンチ作品設置 2018年2月3日



写真-42,43 木製ベンチの設置作業



写真-44,45 木製ベンチの設置作業

6. 2018年度の活動内容(研究補助費継続)

1) 打合せ 2018年4月20日

建築学科環境デザイン分野学生12名(3年生)で、こどもホスピスを訪問した。こどもホスピススタッフから現在までの取り組み、建物の活用、利用状況等の説明を聞き、さらに、建物の各部屋を回り、芝生広場、花壇、野菜畑等の状況確認し、今後の課題等について研修を行なった。参加学生は熱心に説明を聞き、メモを取り、質問をしていた。実際の現場を訪問し、建物、庭園が実際にどの様に使われているかを知ることの大切さを実感した。

2) 第1回 連携ミーティング 2018年4月21日

菜園と花壇・遊び広場について打合せを行った。

参加者は本学が福原、松川、小寺、TSURUMIこどもホスピス側が大矢、青儀各氏、ボランティアの田中氏であった。

3) 第2回 連携ミーティング 2018年6月9日

原っぱ整備に関する活動予定と広場メンテナンスの状況、ボランティア運営に関する状況報告を行った。特に連携参加体制、6月以降実施の花壇イベントに関する調整、夏企画協力について議論した。参加者は本学が福原、松川、小寺、こどもホスピス側が水谷、大矢、青儀各氏であった。

4) 子供たちと菜園植栽 2018年6月9日

菜園・花壇の清掃、畝作りを行い、プランター等の準備を行なった。参加児童は10~15名であった。本学は福原、松川、小寺、学生5名、こどもホスピス側は大矢、青儀各氏、ボランティアの田中氏が参加した。



写真-46 子供たちと野菜の植え付け



写真-47,48 夏祭り準備作業

5) 第3回 連携ミーティング 8月18日

原っぱ整備に関する活動予定、広場メンテナンスの状況とボランティア運営に関する状況報告を行った。また連携参加体制、夏以降の花壇整備や原っぱ整備、生垣について打合せた。参加者は本学が福原、松川、小寺、清水（敬称略）で学生が18名、大学院生2名であった。TSURUMIこどもホスピス側は高場、水谷、青儀各氏であった。

6) 夏祭りワークショップ準備作業と本番

2018年8月18日・19日

第三日曜日はTCHパブリックデーで、当日の参加児童は35名であった。本学参加者は福原、松川、小寺、学生13名、大学院生2名であった。こどもホスピス側は水谷、山本、大矢、青儀各氏、ボランティア田中氏、サポータースタッフであった。



写真-49,50 夏祭り本番



7) 第4回 連携ミーティング 2018年10月5日

原っぱ整備に関する活動予定、広場メンテナンスの状況とボランティア運営に関する状況報告を行った。参加者は本学

が福原、松川、小寺各氏、こどもホスピス側が水谷、青儀氏であった。

8) 第5回 連携ミーティング 2018年12月1日

原っぱ整備に関する活動予定、広場メンテナンスの状況とボランティア運営に関する状況報告を行った。参加者は本学が福原、松川であった。こどもホスピス側は水谷、青儀各氏であった。

9) 2018年活動実施報告会 2018年12月20日

TSURMIこどもホスピスにてプログラム「1. 体験プログラム 2018の実践報告、2. こんな体験ができたらいいな～ウィシユタイム、3. 企画の可能性&ディスカッション」に参加した。

内容は、2016年の手探りで始めた初年度のテーマを「役割を演じなくても良い」「同世代の子どもが楽しい」「比較的安定した時期から」とし、2017年は気付きが多かった2年目で「基幹病院と連携を強化」「お泊まり体験・100世帯」「マンスリーサポーター」、2018年は「多様な体験の創出」「医療連携の本格化」「サポーターの強化」であった。

10) それ以後

2019年2月末までに広場メンテナンス工事を継続して行なっている。

おわりに

2015年から建築工事、屋外工事と大阪芸術大学教員と学生が関わり、2016年から2018年は大阪芸術大学芸術研究所研究調査補助費『大阪市鶴見緑地内「こどもホスピス創造広場」における創作活動、芸術療法の可能性に関する研究』によって建築学科教員と学生が中心になって活動を行なった。

ホスピスが受け入れている対象者は、小学生以上の子どもときょうだいである。大勢の人が集まることへの抵抗感などが

ら体験や経験の場所が非常に限られ、制限がある生活の中で、子ども達には「自分にはできない」「無理」「やれない」という気持ちを引き起こしている。

入院、治療よっての食事制限や感染症にかからないように生活の制限がある小児ガンの子ども、体温調節がうまくできず、医療機器と一緒に移動する為に電源の確保やスペース確保が必要な医療機器を必要とする子どもなどがいる。

2018年11月末現在、登録メンバー（総累積数）102世帯、ご遺族メンバー数20世帯、現登録メンバー数+仮利用75世帯（ご遺族を含む）である。

2018年にホスピスが取組で意図した内容は、「やってもらうではなく自分でやる体験」「親と離れて活動すること」「本物に触れる、プロフェッショナルな人との出会い」であった。

子どもたちに願っていることは、「自分でやる体験」や「できたと実感できる体験」が自己肯定感や生きる力につながってほしいということである。知らない世界を知ることによって選択肢が増え、今後の人生に希望を持ってほしい。そして親への願いは、子どもの新たな一面を知ったり、気づくことによって親としての喜びや希望を感じてもらうことである。その願いに少しでもお役に立てたならば幸いである。

この間、こどもホスピス関係者、こどもホスピスの子どもたちとご父兄、多くの方々のご協力とご支援をいただき、喜んでいただける研究活動ができたことに心から感謝のお礼を申し上げる。